
練習 短編 没ネタ置場

猫師匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

練習 短編 没ネタ置場

【Nコード】

N1931T

【作者名】

猫師匠

【あらすじ】

書きはしたものの「これは無い」と判断したモノや、練習で書いたけどゴミ箱はもつたいたないな作品を投稿する専用の連載小説です。基本的に物語に一貫性はありませんが、たまに同一人物^{ばい}たちが活躍したり、血縁関係あるんじゃない？ ってきなキャラが出てきたりしますが、ほかの作品とは一切関係ありません。って断言できるとカッコいいのですが、ちょっとしか関係ないですよ。ジャンルは無軌道 基本的には一話完結 1万から3万文字くらいが目標 好きな作品や人気な作品があれば続編、もしくは連載（その世界観）

てやるかも知れません。

テラチート戦闘練習（前書き）

主人公テラチートの練習作品

ストレス発散に書き始めたら意外と筆が進みました
最後の方飽きて適当になつてますが
それでもいい方はどうぞ^^；

テラチート戦闘練習

「さあ、早く本気を出してください」

私は今、現在滞在中の町から10キロほど離れた所にある森の中にいた。

何故こんな処にいるのかといえば、ギルドで依頼を受けた盗賊の捕獲、もしくは殲滅のクエストの最中だからである。

現在盗賊の生き残りは7人ほどであり、盗賊は当初の30人から大きく人数を減らしている。

残るは頭目とそれを守っている5人、そして正体不明の黒いローブの人物だけだ。

私は20メートルほど先にいる3人の男たちを挑発するように言葉を投稿かける。

「まだ本気ではないのでしょうか？ まさか、これで本気だなんて言わないでくださいね」

戦闘が開始されてから10分ほどが経過しているが、3人の男たちの服装——元は武装だったのだろう——はボロボロになっており、既に満身創痍といった表情であった。

それに対し、私は無傷。掠り傷は言わずもがな、服にさえ、傷らしい傷は見当たらない。

「この……くそアマあ……」

「絶対に、跪かせてやる」

「奴隷にして、ひいひい言わせてやるから、覚悟しろ……」

まだそれだけのセリフが吐けるなんて、力量差も分らない屑なのか、それとも男のプライドなんてもので『女性に負ける訳にはいかない』なんて、くだらない事を考えているのか。

どちらにしても、私が楽しめればいいのですが――

「うおらあああああああああああああああああああああ」

左側にいた長身の男が声を振り絞ってこちらに突っ込んできた。その男が長身を生かし剣を振りかぶり、上から下へと振り下ろす。それに対し私は右手に持った剣で対応する。

男の剣を持つ手には力が入っておらず、簡単に防ぐことができた。罅迫り合いにすらならず私は剣を弾き、そのままの勢いで男の首を断ち切る。

「次に死にたいのはどちらの方でしょう？ 早くしてくれませんか、頭目達を逃がしてしまうのですが」

「う・・・うわあああああああああああああああああああ」

二人の男たちは自棄になったのだらう、狂ったような奇声を出しながら私の方に向かってくる。

（面倒ですね――）

「術式解放：二重起動：『焰』『颯』」
ショートカット
ダブルスベル

ゴウ！！

男たちの前に巨大な火球が現れ、肉体どころか存在すらも焼きつくす勢いで過ぎ去っていった。

そして、火球が過ぎ去った後に残ったのは焼けた地面と、煙、そ

して肉を焼いた後に残る独特の匂いだけだった。

今の魔法を簡単に説明すれば、下位レベルの炎系統『焰』を、同じく下位レベルの風系統『颯』によって強化しただけなのだが、本来下位レベルの魔法でさえ、私の魔力量で使用するゝ暴走してしまい、単語詠唱と封印式を併用することで無理やり魔力の使用量を上げ、さらに二重起動ダブルスベルや多重起動デュアルスベル——宮廷魔道師でも使用できるものは少ない——を使用することで安定化を図っている。

下位レベルの詠唱ありで単一起動シングルスベルを行っていた場合、この付近100メートルは地形が変わるかもしれない。

「少々やり過ぎたかもしれませんね」

私はそんな感想——実際はやり過ぎどころの話ではない——を呟き、頭目の位置を確認することにする。

「サーチ
探索」

簡易的な術式を起動させ、頭目の現在位置を割り出す。

ここから南西に1.5キロ、と言ったところでしょつか。

術式を起動させたまま、その方向に走り出す。

ショートカットオリジナル エデン
術式解放：複合術式：万能無限

肉体強化に思考強化の複合術式を無詠唱で行い、トップスピードまで一気に加速する。

この魔法を使用したことによつて、私の最高速度はほぼ音速の域に達するのだが、木々を避ける為に時速150キロ程度のスピードまでしか出していない。

このスピードなら頭目の現在位置まで、数分とかからないだろう。

あのロープ姿・・・どこかで見た気がするのですが――

私の関心は頭目よりも黒いロープの人物に移っていた。

盗賊は既に壊滅状態、残っているのは頭目と数人だけなのだから、ギルドの依頼達成の証明に頭目の首が必要だが、それも瑣末な事だと思っっている。

目標まであと100メートルですか。

とりあえず、強化魔法を解き自身の身体能力の身で走り出す。

それでも時速30キロほどの速度は出ている時点で、私の異常性が分かるだろう。

「これは、どういうことでしょう」

頭目まで30メートルほどの地点で森を抜けてしまった。

森の中に隠れながら逃げるならまだしも、ここまで開けた場所に逃げる意味が分からない。

「来たな、漆黒の魔女」

頭目のそばには生き残りであろう盗賊たちと黒いロープの人物、そして足元には数人の縛られた少女達がいた。

「ヴァイス！ 約束道理奴を誘き出したんだ！ ちゃんと殺してくれるんだろうな！？」

頭目が黒いロープに怒鳴っている。

ヴァイス・・・記憶に無い名前ですね。

まあ、偽名の可能性もあるとは思いますが。

「ああ、約束は守るさ」

ヴァイスと呼ばれた男——声からして女性の可能性は低い——は頭目に対して余裕の声で応じる。

「ヴァイス……と呼ばばいいのかしら？ 貴方、何者？」

「ああ、それで結構。漆黒の魔女にその名で呼んでもらえたことだけは、神に感謝してもいいかもしれんな」

「私ってヴァイスと会った事ってあったかしら？ 記憶に無いのだけれど」

「記憶に無くて当たり前だ。俺とお前は初対面だからな」

「初対面にしてはよく私の事を知っているようだけど？」

「当たり前だ、お前は自分が有名人だということを自覚した方がいい」

「それはご親切にどうも」

やはり私の記憶に間違いはなかった様だ。

私はこの男——ヴァイスとは出会った事はない、となれば相手の目的は腕試しか、それとも恨み辛みの代行だろうか？

まあ、気にしたところで私の対応は変わらないのだが——

「ヴァイスの旦那！ そんな事はいいから！ 早くしてくれ！！
こっちは仲間が何人も殺られてんだ！」

頭目が何か騒いでいるようだが——

「黙れ」

とりあえず黙って居てもらう。

これだから低能は——

「で、そちらのヴァイスさんは何が目的？」

「目的？ 目的が分かったところで貴様の行動に何か変化があるのか？」

本当に私の事、良く調べてあるみたいね。

「なら、始めましょうか——」

「始める？ 既に始まっているんだよ！！」

ヴァイスは叫ぶと同時に大量の魔力を放出した。その量は一般的な魔術師10人分にも匹敵する量だった。

この魔力量、普通じゃないわね。

「我願う：闇を司るモノ：死を司るモノ：ここに来りて割れの願い聞き届けたまへ」

ヴァイスが唱えると同時に足元が光りだした。

まさか！？

地面にはヴァイスを中心に30メートルほどの巨大な魔方陣が描き出されていた。

円を基本形に星と月、それにこれは・・・日蝕を表す記号が混じってるわね。

召喚用の魔方陣に闇属性・・・これは拙いわね。

闇系、それも高位の魔族——ないし魔人——が召喚されるのであると予測されるが・・・あの少女たちッ！

ヴァイスは拉致つて来た少女達を生贄に、今行っている召喚儀式を成功させる気なのだろう。

「うつ・・・」

「っ……くあ……」

少女たちが苦痛に顔を歪ませる。
いけない！ 彼女たちの魔力が枯渇すれば、精神が壊れる可能性がある。

「今すぐその術をやめないさい。そうすれば命だけは助けてあげる」
「はっ！ 命なんかいらねえよお！！」

ダメだ、ヴァイスは完全にアツチの人だ。
何としてでも、少女たちだけは救わなければ！

「ショートカット デュアルスベル セット レディ
術式解放：多重詠唱：展開：待機」

私を周囲に大小合わせて50以上の魔方阵が展開される。
魔方阵は宙に浮いたモノから地面に展開されたモノ、私の体や武器までいたるところに展開されている。

私の魔法は基本的に封印式と呼ばれるものは、一度発動する瞬間まで起動させた魔法を一時的に封印し、封印解除のキーワードと起動時の魔力供給によって魔法を放っているのである。

もちろん、封印式では魔法を封印している間、常に魔力を封印術式に流し続けなければならなかったため多くの魔力を必要とするが、元々の魔力総容量と魔力回復が多い私は在庫が^{ストック}減るほど、魔力は増えていくことになるのである。

今発動したのは1ヶ月以上放置してあった在庫を^{ストック}全て発動させるモノで、相乗効果や重複を考慮していない。単に戦闘準備のため、ある程度の魔力の空き容量が欲しかったただけだ。

全ての魔陣の展開が完了する。

「フルバースト
在庫処分！」

私が声を発すると同時に、下位魔法から上級魔法、補助魔法と様々な魔法が一気に発動した。

半分以上が攻撃魔法だったため、大小合わせて40ほどの魔法がヴァイスに向かって行く。

「ハッ！ 馬鹿にしてんのかテメエ！！」

ヴァイスが右手を上から下へと振り下ろす。

ゴバア！！

ヴァイスが、一般の魔術師なら10回殺してもお釣りがくるような魔法を無詠唱の、それもたった一つの魔法で全て吹き飛ばしたのだ。

これで召喚術式が止まってくれば御の字だったのだが、まあ、予想の範囲内でしょう。

情報が少なすぎて、属性が判断できませんね。

もちろん無属性や補助系の場合もあるが、今の威力を加味すれば、考えるのがバカバカしくなってきましたね。

「ヴァイス……てえ……裏切りやがったのか！！」

声の方を見れば、頭目が苦しそうな声で訴えていた。

召喚魔法の生贄に巻き込まれたのか——いや、最初から頭目も生贄の頭数に含まれていたのだろう。

「裏切ったとは人聞きが悪いね。約束は守る。漆黒もきつちりと殺してやるさ。ただ、君たちの命の保証はしないけどね」

「……ッ！ ゲス野郎！！」

ドサッ

頭目はその言葉を最後に、倒れてしまった。

「さあ！ ついに召喚儀式も終わる！ ここが貴様の墓場だあ！！」

「うぐう・・・あつ・・・」

少女達の表情が苦痛に歪む。

「やめ——
こい「召喚！：死を司るモノ！！」
サリエル」

——ッ！？

召喚が成功したのだろう。

周囲に光が満ちる。この光は召喚が成功した時の発光現象だ。

光が収まるとヴァイスの横には白い天使が居た。

その体は小さく、12歳前後の子供にしか見えない。しかし、その手には3メートルほどの黒い大鎌を持ち、その背には3対6枚の白い翼が存在していた。

「誰ぞ、我を喚ぶ者は」

その少女が言葉を発するだけで、強大なプレッシャーが私を襲う。ハッキリ言って格どころの話ではない、次元が違う。

これは、本気を出さないと不味いかもしれませんね。

少女達は気を失ったのか、力無く倒れている。まだ呼吸はあるようだ、早く処置を施さないと危険な状態だろう。

「喚んでやったのは俺だ。奴を殺せ！」

ヴァイスが私を指しながら、呼びだした天使に命令を下す。
しかし、

「ハッ！ 貴様が我を喚んだだと？ 笑わせる」

「報酬は十分に用意した！ 命令に従え！！」

「報酬？ 此の少女達の事か？」

「そうだ。この無垢な少女達の魂が報酬だ。十分なはずだろう？」

「ハハハッ！ ハハハハハハハッ！！ アーハッハハハハハハハ
ッ！！！！」

ヴァイスの言葉に天使が大声で笑い始める。

「フハハハッ！ この無垢な魂が報酬か、なるほど、ハハハハッ！」

「なんだ！ 何が可笑しい！？」

意味が分からないのだろう。喚き散らすヴァイスに天使が答えた。

「その様な無垢なる魂なぞ要らぬわ！」

「な——ッ！！！！」

「我を満足させたいのであれば——」

天使の顔が邪悪な笑みを浮かべる。

「慾に塗れ、罪に穢れた魂を100人分持って来いッ！！」

「——ッ！！！！？」

天使の言葉に、今度こそ絶句するヴァイス。

なんというか、憐れとしか言い様がありませんね。

「例えば、貴様のような穢れ切った魂を」

天使が大きな鎌デスサイズを振る——いや、それを観たのは振り終えた後の鎌であり、鎌の位置が変わっていたために『振った』という過程を想像したに過ぎない。

「——ゴッ……」

ドサッ

ヴァイスが血を吐いて斃れた。

その体は上半身と下半身に別れ、二度と繋がる事は無いだろう。

「フム」

天使がヴァイスの死体——正確にはまだ死体ではないが——に右手を向ける。すると、ヴァイスの体から灰色の球体が浮かび出て来た。

「むう……やはりこの程度か」

天使はその球を右手で掴むと、口へと運んで行く。

「むぐ、うむ……もぎゅもぎゅ、んぐ……」

難しい顔をしながらそれを咀嚼し、飲む込む。

やはり不味い。そう呟きながら天使がこちらを向いた。

「して、其の方は如何する？」

いや、私に聞かないでほしい。むしろ私が聞きたいくらいだ。

「その少女達を助けて、いえ、見逃して頂けるのであれば、それ以外に望みはありません」

私はなんとか応えるが、

「駄目だな。これは我が手に入れたモノだ。返して欲しいのであれば、其れ相応の対価を貰おうか」

此れでも契約は守らねばなんのでな。と続ける。しかし、対価か・・・

それならば――

「私の魔力では代用できませんか？」

「駄目だな」

「では、そちらの頭目では？」

「ふざけて居るのであればこう言ってやる。殺すぞ」

これは本格的に不味いわね・・・

「貴様の魂を寄越すなら考えてやろう」

流石は天使、といった所だろうか。私の異常性を看破する。

「それは遠慮したいところね」

魂抜かれてまで生きて行けるほど、人間は辞めていないつもりだ。

「しかし召喚された我としては、此のまま帰るのも面白くは無い。ふむ、そうだな。暇潰しにこの世界の人間を千人ほど殺して来ようと思うのだが、如何思う？」

「貴方を送り返させて頂きます」

天使や悪魔は基本的に娯楽に飢えている。天使や悪魔といった存在は死ぬ事が無いからだ。殺す事も出来なければ、封印も一時的にしか効果が無い。一時的に封印することは可能だろうが、封印が解ければ何の変りも無く、そこに存在している事だろう。

「ほう、面白い事を云うな。人の子の分際で」

天使は愉しそうに言葉を続ける。

まあ、良い。天使は呟きながら鎌を振りかぶる。

「我が名はサリエル！ アークエンジェル 大天使にして死を司るモノ！ 人の子よ、我に挑む愚者ヒトの申子よ。名を聞こう」

「エリー、エリー」ファルク。漆黒の魔女、なんて呼ばれ方もするわね」

「エリーよ、良い暇潰しに成る事を、期待しよう」

天使——サリエルにとっては私を殺す事に意味なんて無いのだから。私を殺した後に999人殺したところで、満足もしないだろうけれど。

まあ、私が千人の一人目くらいにしか考えていないんでしょうね。

「月よ！ 月夜！ 今此処を満月の光で満たせ！」

急に空に月が登り、辺りが暗くなる。

昼夜逆転！？ 流石天使と云ったところでしょうか。というか『もう何でもアリ』と考えた方がいいかもしれませんね。

「月は未だ三日月、ほんの欠片程度だ。満月まで、耐えて見せろ」

サリエルは言葉が終わると同時に、こちらへと跳躍する。

「——ッ！ 反転！ 障壁！」

サリエルの一撃が当たる前に、なんとか間に合った反重力魔法によって体を宙に浮かせ、体の目前に張った楯によってダメージを軽減する。

「ッ——！！！」

しかし、サリエルの一撃は予想以上に強かった。

体の中をミキサーで混ぜられたら、こんな気分でしょうね・・・
鎌を楯で、衝撃を反重力魔法によって軽減したにもかかわらずこのダメージ。直撃した場合チリも残らないのが容易に想像できる。
いえ、死んだ事にも気付かないかもしれませんね。

「なんだ、その程度かエリーよ。其れでは我が愉しめんではないか」
「鎌を振っただけでこの威力ですか、こちらとしてはバカバカしい
とは思えないんですがね」

しかもこの程度とか、簡単に言ってくれますね。本当に——
これでは戦いの余波だけで少女達の命が危ない。
・・・3分でも稼げれば、十分ですかね。

「楯よ、絶てよ、断てよ、全てを止め、凡てを断ち切り、総てを断

絶させなさい」

流石に無詠唱ではサリエルの攻撃は防げないと判断した私は3重に盾を展開させる。

「その程度で防げると思っているのか？ だとしたら片腹痛し！！」

「断絶の剣、断罪の剣、敵は百の同胞、敵は百万の宿敵——」

「接続詠唱だと！？」

さすがに驚いたのかサリエルがこちらへ向かって飛んでくる。が

「——散せ！！」オーディン『斬殺剣』」

私の詠唱の方が一足早かった。

サリエル目掛け百億の刃が向かっていく。

通常であれば、その一本一本が必殺の一撃となる筈の刃はしかし、サリエルに対しては目暗まし以外に効果は無いだろう。

「おい、人間……」

百億の刃の乱舞が終わった後、サリエルは変わらずにそこに居た。

「この程度の実力なら飽いた。何処へ也と去れ。人の子の分際で我に挑んだ褒美だ、我は追わんと約束しよう」

「いいえ、バンデモニウム時間稼ぎと仕込みは終わりました。——狂気に狂喜しなさい、『万華狂』」

私の言葉とともに強い光が生まれる。

「人の子・・・いやエリーよ！ 先ほどの言葉は撤回しよう。我は敬意を持って全力で貴様と戦おう！」

我に幻術を掛けるとはな——その言葉を最後にサリエル動かなくなった、いや、動けなくしたのだが。

サリエルに対し幻術の効果は良くて3分、今のうちに少女達を助
けなければ——

「ショートカット術式解放：『サーチ搜索』」

少女達の元に向かいつつ魔法を発動させる。

魔法で調べた少女達の状態は最悪ではないが、一刻を争う事に変
わりはない。

「ショートカット術式解放：『ダブルスベル二重起動：『シミュレート演算』』
しずく雫」

範囲を固定し、回復魔法を少女達の周りに固定する。

「ショートカット術式解放：『てんい転移』：少女達をフィングライアまで！」

回復魔法をかけた状態で少女達を転移させる。

送った先には私の知人が居る。そいつに任せておけば最悪、命だ
けは助かるだろう。

「気は済んだか、エリーよ」

「あら、幻術が解けたのなら教えてくれればいいのに」

また掛け直してあげるから、と割と本気で応える。

「何、気が付いたのは、エリーが人の子を送った後だ。気にするな」

あの幻術が本当に3分程度しか持たないなんて・・・流石に御前
天使相手では私も本気を出さないと不味いですね。

「さて、邪魔なモノが無くなったのだ。そろそろ本気を出さないか
？ エリーよ」

「そうですね。ではその期待に応えましょうか」

サリエルの方を向きながら、私はリミッターを解除。

「魔力放出：無制限：『天限』」

「な・・・ッ！ 貴様、其の魔力・・・本当に人間か!？」

サリエルの言葉を無視して、私は次元の狭間に世界を創る。
流石にこの状態で戦ったら、この世界が滅びるだろう。

「堕ちろ『焰獄』」

世界が変わった。

先ほどの夜空から一転、全てが炎に包まれた世界。
周囲には灼熱のマグマが漂い、地上も空も、全てが燃えていた。

「心象世界の顕現^{けいげん}、これが貴様の本性か。憐れだな」

「これでも抑えている方ですよ」

「何が其処まで憎いんだ？」

「今さら天使のマネ事は辞めてくれます？」

「ハハッ、其れもそうだな。ならば、狂乱を始めようではないか！」

サリエルが空に魔法陣を描き出す。

「天空の星よ！ 夜空の月よ！ 其は罪を暴く懺悔の光、其は罰を下す断罪の剣！ 『月詠』！！」

空に描かれた魔法陣から無数の光が降り注ぐ。
私はただ呟いた。

「喰い尽くせ、天狼」

私の言葉に応えるように、地面から現れた狼の顎が無数の光に向かって突き進み、光の雨を喰い散らしていく。

「天狼の部分召喚だと！？」

サリエルが驚くのも無理はない。

私が一部分と言ってもワンスペルで喚んだのは神獣の中でも高位に位置する天狼。

この程度で驚かれても困るんですけどね。

天狼の顎は空の光りを喰い尽くすとサリエルに向かって行く。

「来なさい、龍燈鬼、天燈鬼」

「お呼びですか御主人」

「ご命令でしたらなんなりと、主様」

私に呼ばれて、二匹の子鬼が現れる。

一匹は頭に燈籠を乗せた赤い子鬼。

もう一匹は左肩に燈籠を乗せた蒼い子鬼だ。

「時間を稼ぎなさい」

「御主人、私達が斃してしまっても？」

「出来るモノなら殺ってみなさい」

「主様、どれ程の御時間を稼ぎましょう?」

G A R O O O O O O O O O O O O O O O O

O O

子鬼への命令を終えたタイミングで、天狼の叫び声が聞こえた。そちらを見れば、大鎌によって上顎と下顎を切り離された天狼が魔力の粒子となって消えて逝くところだった。

期まで失望させてくれるなよ！」

「御主人（主様）の御心の俣に！！」

これで私は魔法に専念できますね。

「魔法陣展開：解放：定着」

「木々よ、喜び涙し、感情に任せて爪を立てろ——」

「戦火よ、凡てを謳歌し、血で贖え——」

魔法陣の右に一つ円が追加され、それは紅く輝いた。

「大地よ、怨念を称え、苦しみを歌え——」

魔法陣の右下に一つ円が追加され、それは黄色に輝いた。

「黄金よ、怒り悲しみ、皮を剥げ——」

魔法陣の左下に一つ円が追加され、それは白く輝いた。

「水よ、恐怖に絶望を、希望を求めよ——」

魔法陣が左に一つ追加され、それは黒く輝いた。

それと同時に、緑の魔法陣から黄色の魔法陣へ、黄色の魔法陣から黒い魔法陣へと次々にラインが形成されていき、五芒星を形作る。

「我は神に望む者、我は世界に臨む者、我は新たに神を造り、我は新たに世界を創る。」

木々を燃やせ、灰は土に、金を掘り出せ、水を集めろ。

世界は流転しやがては終える。

来たれ、世界の果よ！」

呪文が完成に近づくにつれ、魔法陣の輝きは強くなっていく。

「龍燈鬼！ 天燈鬼！ 仕上げ！！」

「なっ！？」

私の言葉に子鬼達がサリエルにしがみ付く。

「これで終わりよ、サリエル」

パラダイス・ロスト
楽園の終焉

最後の呪文が私の口から放たれた瞬間に、私の前方から光の奔流がサリエルに向かい放出された。

その光は触れるモノ全てを粒子まで分解させる冒流的な質量の奔流だ。

いくらサリエルが天使だと言っても、これに触れてしまえば消滅してしまうだろう。

光の放出は数分続き、やがて何事も無かったように、その威力に伴った傷跡だけを残して消え去った。そして光が収まった後には、何も残ってはいなかった。

「流石の天使でもこれは防げませんよね」

私は勝利を確信して、世界を元に戻す。

「……っ!？」

世界を元に戻した私は驚愕した。

なぜ、まだ空に月が!？

戦闘を開始してから半日以上はたってはいないはずだ。サリエルが死んでいるのなら、この夜は解除されて、今は青空が広がって居てもいいはずなのだ。

「ふう………流石に今のは危なかったぞ」

声の方を向くと、そこには無傷のサリエルが居た。

「アレをくらって無傷ですか」

「無傷に見えるだけじゃ、体全てが一度吹き飛んだからの」

「まだ戦いますか？」

「闘っても良いのだが、流石に我も限界と云うモノじゃ」

負け戦はせん主義でな、とサリエルは夜空を昼に戻す。

「なら、これからサリエルはどうしますか？」

「戦にも負けたしの。我は潔く無に還り、また何時の日か召喚されるのを待つかの」

「私と一緒に旅をしませんか？」

サリエルにとっては、誰かに召喚されるのを待つよりもマシなはずで、私にとっては、誰かにサリエルが召喚されるのを防ぐ事が出来る。まさに一石二鳥だ。

「旅、だと？」

「ええ、世界を観て周るんです。全てを観終えたら、また最初からグルグル、グルグル。世界中、時代中観て周るんですよ」

「エリー、一つ聞いていいか？」

「ええ、私に答えられる質問でしたら」

「貴様は我と同類か？」

「いいえ、私は天使でも、悪魔でもありませんよ」

ただの、化物です。と続けた私の言葉にサリエルは愉快そうに笑った。

「それは良い。化物が二人、楽しい旅が出来そうだ」

笑顔で答えたサリエル。

「これから何処へ行きましょうか。要望があれば言ってください」
「我はこの世界を知らんからな。強いて言えば何処かで美味しい物が喰いたいな」

「ではグリザ王国へ向かいましょうか。あそこは果物が有名なんだけれど、それを牛肉に合わせた料理が絶品なの！」

「其れは美味そうだな！ よし、さっさと行くぞ！」

二人は楽しげに王都への道に行く。

テラチート戦闘練習（後書き）

天使さんの力を封印して一緒に旅を
というプロットもあったのですが
表現が難し過ぎて無理でした……

4人の会話（前書き）

突発企画 まどマギのタイトル繋いで小説書いてみた。

4人の会話

4人の設定

部長（お花畑） ボク（現実） シガ（直球） サイトウ（科学）

一発書きなんで設定とかぶれてるかもしれない。

後キャラが分かりずらいのは仕様

4人の会話

その日、ボクは何時も通り部活に参加していた。

「夢の中で逢った、ような……」

いきなり部長が電波な事を言い出した。

「どうしたんですか部長、いきなり電波なことを言い出して」

ボクが突っ込む前にシガさんの鋭いツツコミ。

「いや、今日転校して来た奴がいたじゃない？ その人が昨日の夢に出て来た気がして、そうだったら、それはとっても嬉しいなって」「いやいや、何が嬉しいのか私にはさっぱりなんですが」

サイトウさん、もっと言ってやってください。部長の頭の中は何時もお花畑なんですから。

「だって、あたしたちって運命的な出会いしてるじゃない？ だったらあの転校生も、あたしたちの部に入ってくれないかなって」「それは入ればの話です。それに、ボク達の出会いなんて文庫化しても10冊ぐらいにしかありませんよ」

「それだけの量があれば十分運命的な出会いだろ！」

「シガさん、最近では10冊超えるなんて普通です。インデックスとか生徒会と比べれば、ボク達の出会いなんて、むしろ平凡を通り

越して劣悪です」

「劣悪は酷いです。せめて諸悪と言って欲しいです」

「部長、諸悪と言うのは全ての悪事の事ですよ。まあ、確かに部長がいれば、国家権力とかもう何も恐くないですが」

サイトウさんはマイペースでいいですね。でも、確かに部長さえいれば国家権力どころか、某北の国くらい数分で方が付きそうです
ね。

「話を戻しますが部長のそれは予知夢ですか？」

「そうそう、それぞれ」

「予知夢と言うのは、今まで経験した事を夢で整理している際に、その一部が記憶に残り、次の日、またはそれ以降に夢と同じような状態、状況になった際、予知夢だと誤認してしまう。と言ったところでしょうか」

「サイトウの説明だと夢も希望もないな」

「奇跡も、魔法も、あるんだよ！」

「部長はそろそろ大人になれ」

「シガとサイトウがいじめる」

部長がボクに助けを求めるべく、抱きついてきた。

ああ、部長の膨らみがボクに押し付けられている。ああ、部長可愛いな。これは、逮捕されても仕方ない。しかし！後悔なんて、あるわけない。

「部長、慰めるどころか、胸を押し付けられて喜んでいますよ」

「そんな！？皆であたしを苛めるなんて、ここはあたしの部なんだよ！こんなの絶対おかしいよ」

ああ、膨らみが離れて行く……ハッ！ボクは今まで何を？

ヤバイ、部長の膨らみは性別を問わず催眠効果があるのを忘れていた。

「部長は現実世界と向き合えていますか？ 本当の気持ちと向き合えますか？ 脳内世界は現実ではありませんよ？」

「あたしって、ほんとバカだけど！ 流石にそのバカにされ方は腹が立ちますよ！」

「大丈夫です。部長をバカにはしていません。からかっているだけです」

「それはもつと酷くなってるよ！ あたしを苛めるなんて、そんなの、あたしが許さないよ」

「何言ってるんですか部長、ボク達は愛でているだけです。決して辱めている訳ではありません」

「もう誰にも頼らない！ 一人で生きて行く！」

あちゃ、部長が拗ねてしまった。

これはそろそろフォローが必要だろう。

「部長、そんな悲しいこと言わないでください。部長はボクたちの最後に残った道しるべなんですから」

「グスツ。本当？」

「ええ、本当です」

「ええ、部長はわたしの、最高の友達ですよ」

「えへへ、皆大好き！」

今日も4人の部活。

それ以上でも、それ以下でも無い、日常。

ボク達は、それを繰り返し、繰り返し、いつか終りが来るまでは、日常を繰り返して行くのだろう。

4人の会話（後書き）

書いてみた物の使いどころがない。
というか、もう思いつきで書きなぐっただけなんで気にしないで楽しんで頂けたら幸いです。

鰯の頭も信心からって言うけど鰯が神じゃね？（前書き）

鰯の頭も信心いわしかしらからを使って
神を証明してたら鰯が神だった件

暇な時間に無理やり作った式なんで結構ボロがあると思います。
これはおかしいと思ったら普通に突っ込み待ってます。

『 』 イコール 同じモノと言える

『 』 ニアイコール 同じ様なモノと言える

ちよつとした違い

分かりにくいかもしれませんが違う物です

鰯の頭も信心からって言うけど鰯が神じゃね？

神は完全な存在である

完全なモノは不完全であるともいえる

？ 神Ⅱ完全 不完全

鰯の頭も信心いわしのかじりから

鰯の頭も信じる心があれば尊い物に見えてくるという意味

神は尊い存在であるともいえる

英語の初めから終わりまで (from 『A』 to 『Z』)
に照らし合わせた場合

？ 初めⅡ鰯の頭 終りⅡ尊いモノⅡ神

？ の式と明けない夜はないという言葉を含わせると次の式が成り立つ

？ (初め 終わり)Ⅱ (鰯の頭 神)

？ の式を？と合わせて

？ 神Ⅱ完全 鰯の頭Ⅱ不完全

？ の式から「鰯の頭Ⅱ不完全」と言う事が分かる
この事から、鰯の頭(不完全)の対照にあたる
鰯の頭(完全)が神であると言える

鰯単体で考えた場合

？ 鰯の頭⇨頭だけしか存在しない鰯の死体（以下「鰯（死体）」）
これの反対は、

全身が揃っていて、生きている状態の鰯（以下「鰯」）

鰯（死体）も「鰯」も鰯というカテゴリに含むが同じものではない
この事から、？の式を整理する

？ （鰯（死体）⇨不完全） （「鰯」⇨完全）

？の式を？の式に代入して

？ 鰯（死体） 「鰯」⇨神

つまり、

「鰯」は神である

Q・E・D・

何匹いるんだよ・・・

鰯の頭も信心からって言うけど鰯が神じゃね？（後書き）

鰯が神様だったら何を願いましょう。

やっぱりカルシウムとDHAでしょうか？

9月から頑張ろうと思ってる作品（前書き）

完結してない話ばかりですいません^^;

9月から頑張ろうと思ってる作品

眼前に広がる虚無の空間。

漆黑、暗黒、深淵の中に瞬く小さな光。

重力と言う鎖から解き放たれ、ただ夢現にまどろむ感覚。

無重力ってというのは落ち続けている状態らしいが、私はこの感覚が好きだ。

『落ち続けている』

まさに、私に相応しい状態だ。

落ちる、堕ちる、墜ちる。

ああ、早く、死なせて欲しい――

つと、またネガティブな方向に思考が偏っているのを感じて、体を動かしながら思考を切り替える。

右腕を動かす。

同時に、巨大な機械の体躯が動く。

画面を見ながら動作の確認。

何度も行つた、これから何度でも行つ動作確認。

駆動系——異常無し。

制御系——異常無し。

武装系……………

メインウェポン——異常無し。

サブウェポン——異常無し。

近接系——各種異常無し。

……………オールグリーン

何度も見た青い表示。

飽きた……………

私が居るのは上下左右1光年の広さを持つエリア『A24』。

その中心部のデウスマキナ魔道機動兵のコックピットに居る。

100年前——正確には98年前、宇宙から飛来した隕石に生物のDNAらしきものが発見された。

そのDNAを解析して行くうちに、研究員が暴走。

最終的には非人道的な実験やらなんやらをやったらしい。

更に何の奇跡か偶然か——この場合は不運や不幸と言っても過言ではない——隕石から採取したDNAの人体に移植する事によって、ヒトは更なる進化を遂げる事になる。

魔人。

DNAを移植され、低確率ながらも生き残り『異能』を手に入れた新人類とも言うべき存在。

魔人たちはその勢力を急激に伸ばし、半世紀ほどで個体数が旧人類と同程度にまで増える事になる。

それは言うまでも無く争いの火種となり、あわや世界大戦にまで発展するかに思われた。

しかし、

私達、いや、全人類は考えるべきだったのだ。

宇宙から飛来した隕石。

何億光年先から旅をしてきたDNA。

それが、何処から来たのかを。

世界大戦まで後何日。

そのぐらいの瀬戸際で（幸か不幸か）宇宙から蟲^{ウエボン}が地球に降り立った。

ハッキリ言つて地球は宇宙人にかまけている余裕なんてなかったはずなのだが、蟲^{ウエボン}は地球に降り立つとともに地球人を攻撃し始めた。もちろん。

旧人類、新人類の区別無く。

むしろ戦争なんてしている余裕がなくなった人類は、一致団結して蟲^{ウエボン}の脅威から地球を守る事になる。

なんて事になっていれば話は別だったのだろうか――

旧人類VS魔人VS蟲^{ウエボン}

という、ごちゃ混ぜ状態に突入。

旧人類と魔人も表面上は手を組んだように見せかけ、裏では相手

を絶滅させてやろうと足の引っ張り合い。

これでは勝てるモノも負けてしまうのは当たり前だろう。

まあ、手を組んだ所で勝てはしなかっただろうけど……

結局、人類は地球を追い出され、限られた宇宙空間での生活に身をやつすことになるのです。

それでもまだ、^{ウェボン}蟲の脅威を取り除いた訳ではない。

実際、^{ウェボン}蟲が何処から来ているのかだって分かってはいないし、種族間の抗争だって終わっては居ない。

しかし、ヒトは遅い。

宇宙空間で生活するようになり半世紀程が経つが、その間に魔道機動兵の開発や、宇宙プラントの製造、コロニーの開拓などなど。数え上げればキリがない程に順応してきている。

そして、今私が乗っている^{デウスマキナ}魔道機動兵。

CPUを脳波とリンクさせて疑似神経経路を創りだし、自分の手を動かすように機械の手を動かす………らしい。

私自身よく覚えていないのは仕方ない。

仕様書とか10冊ぐらいに分けられるんじゃない？　ってくらいに分厚いし、講習だって半年間に詰め込みで覚えさせられて半分も覚えてないし。

ぶっちゃけ動けば問題ない。

機械がどうして動くかなんて気にしたら3秒で死ぬのが、ヒトが『今』生きている場所だ。

最低限のことが分かっていたら問題ない。

つまり、動くモノは動く。

——ピピピッ

「通信？　こんな辺境に何の用だし」

——ピピピッ

「はいはい、今出ますよ〜」

——ピピ

「はい、こちらA24。デルタ01 識別コードも確認しますか？」

『デルタ01もうちょっと緊張感を……相良少尉には言うだけ無駄でしたね』

視界の片隅に不機嫌な女性が映し出される。

セリア「K」赤羽。階級は曹長。

日本人とアメリカ人のハーフで、黒髪に碧眼、残念なことに純和風な体格で、和風美人と言えば聞こえはいいが、つるぺ——

『左遷しますよ?』

「本当にやってくれるならありがたいんだけどねえ」

『昇格させますよ』

「すいません勘弁して下さい」

私の同期であり機械関連の知識は天才的だ。

彼女の手にかかれば軍のファイアーウォール程度——紙クズ同然だろう。

『昇格が嫌いな軍人つてのも珍しいわよね。給料は良いらしいわよ、大佐』

「大佐の話？ 交際迫られてるのは確かだけど……………ねえ？」

『お！ 遂に確認が取れたわ。リークしよう』

「私には関係ないからいいわよ」

楽しそうな表情の彼女にGOサインを出しておく。

噂が流れば大佐の猛烈アタックも回避できるかもしれないし。

「ってか、なんか大事な話でもあったんじゃないの？」

『そうだったそうだった。更に昇格しなくなったら仕事してよね』

「繰り上げで無理やり少尉にしないと、更に昇格？ 本当に勘弁してよ」

『はあ……………降格したいの？』

「命令違反で軍曹に戻してくれるほど人材豊富じゃないのは知ってるのよ」

『まあ、いいわ。A24救命信号。搜索と回収、よろしくね』

「はあ？ こんな辺境で救難信号って……………中身腐敗してても知ら

ないわよ？ それにこの宙域の監視任務はいいの？」

『相良少尉も発言した通り、辺境ですから』（ニコ

そう、今私が居る宙域は辺境も辺境。

1世代前には賑わっていたらしいが蟲ウエボンの襲撃に合い寂れた場所である。

『位置情報を転送します。回収任務よろしく願いします』

「りょうかい」

不真面目な返答を無視して通信が切れる。

まったく、真面目ちゃんだなあ。

「かいしゅうだっけ？」

——ピポン

「ああ、これか。面倒だな、行きたくないな」

ばやきつつも転送されてきた位置情報に従い現地へと向かう。

幸い転移は使う必要が無さそうで助かった。

あれ使つとカロリー消費しちゃてお腹すくし面倒なんだよね。

「回収品はどうこかな」

あつと、アレかな？

楕円形の小さな脱出ポットを発見。

サイズ的には中の人はず人が限界だろう。

随分新しいモノに見える。

誰かの悪戯つて可能性も見えてきた………主犯は覚悟しとけよ。

「あーあー、こちら連合軍。救命ポットの中の人々たち？ 居たら返事してね」

「たす——こ——だけで——け——」

まっず、中に人居たっぽい。しかも複数。

「もう大丈夫ですよ。ポットとマキナを繋げます。その後すぐに転移しますので、多少気分が悪くなるかもしれませんが我慢してください」

『——とう』

ありがとう……か。

ノイズで聞き取り難くても分かる言葉ってあるよね。

——ピーピー

……接続完了

「転移します」

異能を発動させ、機体が蒼い光を放つ。

光は救命ポットまで包み込み、光が収まると同時にその姿は消えていた。

後に残ったモノは虚無の空間だけとなり。

動くモノのない死の世界がまたそこに広がっていた。

9月から頑張ろうと思ってる作品（後書き）

他の作品もがんばります。

応援とか批判とかメッセージ待ってます。

神様が役に立たない（前書き）

ダメだったよパトラッシュ……

てことでボツネタ入りです。

書き途中だった部分も含めてあるので、最後の方は読みにくい状態です。

あしからず。

神様が役に立たない

憎い。

憎い、憎い、憎い。

神が憎い。

妹を殺した存在が憎い。

両親を殺した運命が憎い。

この人生を用意した存在が憎い。

この世界の運命が憎い。

何よりも――

そうだ、何よりも――

何も出来なかった自分が、憎い。

なぜ自分が生きているのかが分からない。

今までの人生には意味が無かった。

これまでの人生に意味は無かった。

それも終わる。

意味の無い、無駄しかなかった人生が終わる。

この体はもう限界だ。

改めて考えても、私の人生に意味は無かった。

両親が死んで、妹が殺されて、最後に残った私も死ぬ。

やっと終わる。

顔には右上から左下にかけて大きな傷。

体にも無数の刺し傷、特に腹に受けた刺し傷は背骨を断ち背中まで貫通している。

右手はもう動かない。

左手はいつの間にか肘から先が無くなっていた。

唯一の救いは、消し炭にされた下半身の感覚が無い事かもしれない。

まあ、傷に関係なく、私の体は病に冒されているから、半年はもたないらしいが。

半年が数分になった程度、それでも私は安堵を感じている。

救いを感じている。

やっと、やっと死ねる。

死ぬ最後の瞬間まで世界を憎悪していた私。

最後の瞬間まで、神を憎悪している私。

ハハハ——

みんな死んでしまえ！

何此処？

いや、何処とか以前に、真白過ぎ。

目が痛い。

ああ、疲れた。

体だるいし。

寝たいんだけど、電気消してくれない？

「こらこら、寝るな」

「誰？ 私寝るから、3時には起こして」

「だから寝るなっつってんだよ」

「何よ、私疲れてるの。さっきまで——」

あれ？ 私何してたんだっけ？

えええ？ 記憶……はあるわね。

「お主は死んだんじゃよ、ふおっふおっふおっ」

「黙れクソ野郎」

「……………」

20歳前後の青年がしょぼくれていても可愛くない。

そうだ、記憶をしっかりと辿ればいいんじゃないか。

そう、朝起きて、戦って、夜は寝て、朝起きて、戦って、夜は寝て——

って、いつからこんな生活してたんだっけ？

あっ！？

今日は魔王城に攻め込む日じゃない！

「そこのお前、今何時だ！？」

「此処に時間なんて概念は存在しない」

「はぁ？ いや、私急いでるんだけど」

「お前が参加した城攻めなら、負けたよ」

「——！？」

まって、ちょっと待ちなさい。

え？ 負けた？ 国の総戦力で挑んだ戦に負けた？

「出鱈目な事言わないで！」

「結果が知りたいなら今から流そうか？」

「何を、言って——」

真白だった空間に、突如現れる極彩色。

白しか認識していなかった意識の中に、カラフルな映像は意外と堪える。

「水月2週、第5の日、6：57時より開始された魔王城侵攻作戦」

青年の言葉とともに、映像が動き出す。

「7：35時、戦場は王国軍優勢で推移」

ああ、私が居る。

その行動も、姿も、戦い方も、別の人物の様に感じはするが、間違いなく私だ。

「9：01時、魔王殲滅班『ピースメーカー』が城の最奥、つまり魔王の部屋に到着」

そうだ、あの扉を開いた先に魔王が居た。

悠然と、悠々と玉座に座り、私たちを見下ろす魔王。

「9：03時、魔王と戦闘が開始、その後20分程、『ピースメーカー』が善戦を繰り広げる」

ああ、そうだ。

間違いなく押していた。

魔王を倒せる後1歩の所まで迫ったはずだ。

「9：25時、『ピースメーカー』の楯を庇って前衛の1人が死亡、そのまま戦闘は魔王優位に推移し始める」

え？

いや、そんな、まさか。

おかしい。

だって今まで、あれ？

記憶が無い。

此処から先は、覚えていない。

「10：29時、『ピースメーカー』最後の1人が死亡。つまり――

「――」

私は――

「お前が死んだ」

「その後は言わなくても分かるよな」

そうだ、攻めの要が失敗したんだ。

王国軍は敗走を余儀なくされたに違いない。

「で、あんたは死神なんかで、私を地獄にご招待ってやつ？」

「いやいや、俺はこの世界の管理者、君が言うところの神ってやつだ」

「お前が――」

こいつが、神……

憎み続けた存在。

こいつさえ、殺せば。

「そこでお前に提案です！」

テンション高いなこいつ。

「あなたも神になってみませんか？」

ああ？ 髪？ いや神か。

「死ね」

「そうそう、今ならなんと——え？」

「私、神様が死ぬほど嫌いな……もう死んだ出るんだっけ？
なら、さっさとくたばれ」

私の人生には無縁どころか、死ぬまで憎み続けた神になる？ 私
が？

笑えない、冗談じゃない。

「今なら神様特典も付いてくるよ？」

「さつさと私のこと解放してくれない？ それとも転生？」

「この世界には輪廻転生システムは無いから、死んだらそれまで、ハイさよなら」

それは良かった。

こんな胸クソ悪い世界でもう一回人生やり直せとか言われたら、さすがの私も発狂している自信がある。

「いいから、さつさと私を消して、あんたの顔見ると殺したくてしょうがないから」

「妹に会えると言っても？」

「……………」

「疑うような目で見るな、神様嘘付かない」

「本当に、逢えるのね？」

死なせてしまった妹。

もう会えないと思っていた妹。

謝りたかった、償いたかった。

たった一つだけの、後悔。

「神様になれば結構仕事が多いんだよ。その秘書兼補助係として、生前に出会った事のある人物の中から、既に死んでいる者を指名できる制度がある」

「それじゃあ！」

「魂が消えて無ければ——」

「今すぐ私を神にしなさい」

「怖いから離れる。ちゃんと説明する」

「早くしなさい」

渋々神の胸元から手を放す。

「いきなり神様って訳じゃない」

「さっき神になりませんか？って勧誘受けたんだけど？」

「最初は候補からだ、神候補になった者には、未来の秘書権補助係パートナーを1人選ばせている。神になったから選べといっても、その時に魂が消滅していたら選ぶ事が出来んからな」

「妹の魂はまだ存在しているんでしょね？」

「ああ、ちゃんと存在しているぞ。魂の保管期間は限界寿命の2倍、つまり人間なら200年って決まっているからな」

神候補になれば妹に会うことが出来る。

その事実だけで即決。

はい、Yes。それ以外の選択肢は存在していない。

「神候補になると、その他にも様々な――」

「もういい」

「――は？」

「さっさと私を神候補とやらにきなさい」

「ハッハッハッ、いい性格してるぜお前」

償えるチャンスを貰えるのだ。

それだけ果たせば、もう神候補とやらに未練は無い。

さっさと辞めてしまえばいい。

「最終確認だ、汝、リリアーク・アハトリア——神を望み、神に挑む事を此処に誓うか？」

「誓ってやるよ、悪魔辺りにな」

「良い返事だ。これからよろしく」

「死ね、クソ野郎」

今、私は廊下を歩いているらしい。

いや、さっきまで居た空間と同じく真白い廊下。

壁や天井、床との境目さえ分らないほど真白過ぎる。

自称神が廊下だと言っていたので廊下だと判断しているが、ここが広い空間だと言われても、私は自称神の事を信じるしかないので判断しようがない。

まあ、数歩横にズレて手を伸ばすと何か触っている感覚はあるから、狭くて長い道を歩いている事だけは分かる。

流石に、精神的に疲れてきた。

同じ様な——この場合は全く同じ空間と言っても過言では無い——場所を歩き続けているんだ。その疲労度は底が見えない。

「ここだここだ」

30分ほど——感覚で判断しているため、まったく当てにならないが——歩いたところで、右側にいきなり現れた黒い木製の扉の前で止まる。

神は普通に右手でドアを開ける。

少しガツカリ。

神とか言ってるから不思議パワーで開けるのかと期待していたのに。

「——？ ああ。手を使う必要はないんだが、癖でな」

え？ と言う事は、さっきのは私が気付かなかっただけで、何か不思議パワーを使用して開けていたのだろうか。

「手で開けた方が早いし、ここ自動ドアだし」

「本当に不思議パワーとか関係ねえ！」

「いいから入れ」

部屋の中は、また真白い空間なのかと思えばそうでも無く、普通に一般人の部屋と言った感じで、少し拍子抜けした。

奥の方には本だなと机。それから、茶色い木製の扉が一つ。

本棚にはミッシリと詰まった本、机には書類やらペンやらが散乱している。

手前には来客用の机とソファー。

全体的に趣味が良い悪い以前に、質素（悪く言えば貧相）過ぎて評価のしようがない。

「おゝい！ お茶の準備をしてくれ。棚に茶菓子も入ってたはずだから、それも持ってきて！」

「——はい」

神が呼びかけると、部屋の奥から返事が聞こえた。

たぶん扉の奥は、給湯室の様なモノなんだろう。

「まあ、立ち話もなんだし座れよ」

何か釈然としないが、歩き疲れて（精神的に）疲れているのは確かなので、神の対面に座る。

神の隣？ 殺さないで済ます自信が無い。

「まずは現状確認だ」

「現状確認って——私死んだ、自称神と契約した、神候補になった。これ以上に何かあるの？」

「自称は余計だが、鏡を見てみる」

「鏡なんてどこに——」

目の前に鏡が現れた。

そんな不思議現象よりも、鏡に映った姿に——眼を奪われた。

そこに映って居たのは——

腰まで届く、長い黒髪。

二十歳にしては、幼い顔立ち。

貧相では無いが、起伏の乏しい体。

見慣れていた、金髪碧眼では無く。

懐かしい、日本人の姿だった。

何を言っているんだと言われるかもしれないが、私は転生者と言
う奴だ。

日本人として過ごしていた期間は20年程。

二十歳になった次の日にトラックに轢かれたのは、あまり思い出
したくないが、脳ミソに強く刻まれている。

居眠りしてた運ちゃんの事は絶対に忘れない。悪い意味で――

「何でこの姿をアンタが知ってんの？」

「そう睨むな、俺が知ってたわけじゃない。お前の魂が識っていた
……いや、お前の言葉を聞いた限りでは、覚えていたといった方が
正しいのかな？」

「魂？」

「お前の魂を核にイメージを固めたらそうなった」

なるほど、確かに今生（？）の姿も、それなりに気に入っては居
たが、やはりこの姿の方が落ち付く。

と言うか、日本人であつた時は二十歳で死んだとは言っても、こ
ちらでは19歳で死んでしまったはずなので、まだ日本人で居た期
間の方が長いと言える。

精神年齢について考えた奴は出て来い。内臓引き抜いて、切り落とした四肢を替わりに詰めてやる。

「お茶入りましたよ」

懐かしい声が聞こえた気がして、そちらを見れば――

「エ、エリー？」

「え？ 何処かでお会いしましたっけ」

「……………」

「どうした？」

「――ん？」

小首を傾げるエリー。

か、かわいい――じゃなくて！

今、私前世の姿！

この姿で「貴方のお姉ちゃんですよ」とか言える訳が無い！

信じてくれたとしてもそれはそれでエリーの頭が……エリーは頭の良い子であって欲しい！

「あ、たぶん私の勘違いです。私たち初対面ですよ」

「そうですか。わたしエリーゼって言います。エリーって呼んでください」

何とか誤魔化されてくれたらしい。

「私はリ……リサって言うの、よろしくエリー。それと自称神、ちよつと面貸せ」

「女の子がそんな言葉使いはダメですよ」

咄嗟だったので前世の名前、名乗っちゃったし……アドリブは苦手なのよ！

それにしても、妹に言葉使いを正されるのは何時振りだろう。

「あ、ごめんなさい。お姉ちゃんと似ていたので、つい注意しちゃいました」

「いいのよ、私の方も言葉使いが悪かったのは確かだから。では自称神様殿、少し御顔の方を拝借しても宜しいですか？」

「いいが、ここで話してもいいんじゃないか？」

「いいか……いいですか？ 私^{わたくし}が笑っている内に、可及的、速やかに、廊下へ、出て頂いても宜しいですか？」（ゴゴゴゴゴゴ）

「あ、ああ。分かった」

大人しく廊下へ出て行く神。

惜しい事をした。主に私が――

「で、どういう事なんだ？ ああ！？」

「何を言っているのかよく分からないんだが」

とぼけるとはいいい度胸だ。

「お前最初に行ったよな？ 神候補になったら妹と会えるって」

「出会えたじゃないか」

「神候補になったのはついさっきで、まだパートナー選んだ覚えないんだけど？」

「まだ選んでないのは当たり前だろ？ 俺も聞いた覚えはないし」

「なら、なんでエリーちゃんが此処に居るのよ!」

「お前その歳でエリーちゃんとか」

「うるさい! いいでしょ別に、内臓抜くわよ」

「それは照れ隠しにしても酷いと思うんだが」

生前では反抗期に入ってたのか、呼んでも返事してくれなくなっちゃってたのよ。

それどころか、無言で物を投げてくる事もあったし……

そうよ! 今は他人ってことになってるんだから呼んでも大丈夫じゃない! って、言ってる悲しくなってきた。

「八当たりよ。出来れば脳ミソだけでも繰り抜かせて」

「さらに酷いな」

「いいから、なんでエリーちゃんが此処に居るのよ」

「神候補だからだろ?」

「は?」

「お前と同じ、神候補。分かったか?」

いやいや、ちょっと待ってほしい。

「貴方パートナーとして蘇らせろって」

「俺はそんな事、一言も言った覚えがないんだが？」

あれ？

「妹に会えるって言ったわよね？」

「ああ、言ったな」

「パートナー選べって言ったわよね？」

「ああ、言ったな」

「つまり、神候補になってパートナーとして妹を甦らせろって事でしょ？」

「そんな事は誰も言って無いな」

なんて事の無いように嘯く神。

「悪魔かデメエは！」

「お前が誓った相手は？」

「悪魔だよ！ チクシヨウ！」

「このお茶美味しい。エリーちゃんが淹れてくれたの？」

「あ、はい。それよりその——」

「ん！ このお茶菓子もおいし～。ね、ね、エリーちゃんも、ハイ、あゝん」

「え、そんなむぐつ——もぐもぐ」

先ほど、「私の事はリサって呼んで」と言ったら、「なら、わたしの事はエリーと呼んでください」と言われたので、私は堂々と彼女の事を『エリーちゃん』と呼ぶことにした。

可愛いわ、世界一可愛いわ——ハアハア

「あの、廊下に出て行った神様が戻ってこないんですけど……」

「ん？ あの自称神様ならトイレに行ったわ」

服やスカートに付いてる紅い液体はケチャップですよ。

天然、無添加、着色料無しで、鉄分が豊富。

「神様でもトイレに行く事があつたんですね！」

「何でも10年に一度は行きたくなるらしいわ」

「それが今日だったんですか」

「神様も大変よね」

家の妹は頭の良さが自慢です。

疑った奴、ちょっと屋上に行こうか。内臓引き抜いてやるから。

「まったく、神様に対してこの仕打ち……」

「アンタが悪いんでしょうが」

「お前が参加した戦線なんだが、アレのおかげでやっと魔王を倒す
目途が付いた」

「は？」

「いやあ、大変だったぜ、まったく。人間の数は減らさんといかん

し、減らし過ぎても問題あるしな」

「魔力と不活性魔力についての講義になるが……まあ、分からんだろうから聞き流しておけ」

「人間は普通に生活しているだけでも不活性魔力を排出しているんだが、それを吸収して魔法を使っているのが魔物だ。その過程で不活性魔力は純魔力に転化され、それが世界を周る事で様々な不純物と結びついて魔力になる」

「人間が排出した不活性魔力、それを吸収して魔物が生まれる」

「人が魔法を使い始めたのがそもその問題だったんだ」

「その所為で不活性魔力が増えすぎ、結果……不死王、現魔王が生まれた訳だ」

「お前は不幸の上に幸福を感じた事は無いと言い切れるか？ 魔物にもその生活が有り、幸福があつた訳だ。その命を刈り取った時、その不幸を感じた時…… 幸福を感じた事は無かったと言い切れるか？」

「結局はバランスだ。世界はバランス、常に平行に出来ているのが世界って奴なのさ」

不運少女（前書き）

ボツネタです

不運少女

「ああ、世界、滅びてくんないかなあ」

路地裏の片隅——ぶつちやけゴミ箱の中——で少女は溜息と共に物騒な呟きを漏らす。

服装は汚れ、体のあちこちに擦り傷が目立つ彼女は現在逃亡中。

何からって？

借金取りからです。ハイ。

彼女の名前は音羽^{おとわなぎは}渚。

彼女は都内の進学校に通う平凡な3年生である。

ここで云う平凡とは、世間で言うところの平凡とは違った意味合いになるかも知れないが、極めて平凡な高校3年生である。

容姿は平均、最近はやっと大きめの胸が気になってきたお年頃。

髪はアジア系特有の黒髪を腰の辺りまで伸ばしている。髪型はその時々や目的によって変えてはいるが、基本的にはポニーテール。

白いリボンで縛ったポニーテールは、彼女にとっては密かな自慢だったのだが、今は見る影もなくぼさぼさ状態。

此処でちょっと聞いてもらいたいことがある。

たぶん、この話を聞いてもらわない限り、なぜこうなったのかが理解してもらえないだろうから。

まあ、半分以上は彼女の愚痴で、現実逃避の為に誰かに聞いてもらいたいだけで、それ以上の意味は無いし、それ以下の話でもない。

まず、彼女には運が無い。

それはもう運が無い。

生きているのが辛いくらい運が無い。

幸運と辛運って一画違うだけで、どうしてここまで違うんだろう。

閑話休題。

彼女は不幸だと嘆きたい訳では無い事は理解してほしい。

不幸な人生なんてモノは、その辺にゴロゴロしているだろうし、まず日本に生まれる事ができた時点で幸運な部類に入る事を彼女は

理解しているからでもある。

不幸が欲しければちよつと飛行機に乗って東南アジアの方に逝ってほしい。

まあ、幸運は持ち合わせていなかった彼女でも、悪運は掃いて捨てるほど持っていたらしいのは、この後の話を聞いてもらえれば分かって貰えるだろう。

文字通り履いて捨てられたらどれだけ楽なことだろうね。

さて、何処から話そう、そうだね。まずは、彼女の存在感が薄い理由から話そうか。

音羽が生まれたのは春先で、冬には双子の妹弟が生まれたらしい。

私はよく覚えてない。

まあ、覚えていたら驚異的かもしれないね。

音羽は生れ付き大人しい子だった。

夜泣きもしなければ、好き嫌いも無い。その反面、妹弟は手のかかるヤンチャ共で、両親はそちらに掛かりつきりとなってしまった。

この時点で私の存在は忘れられがちになっていた。

それでも、人間の生存本能というのは偉大だ。

親は居なくても子は育つ。

この言葉をまさに地で行った私には、生き抜く事に関しては他人を寄せ付けない自信がある。

まあ、その頃の弊害というかなんというか……

私の対人コミュニケーション能力と存在感は酷いものになってしまった。

幼稚園の頃、私だけ遠足に連れて行って貰えなかったり、送迎のバスには忘れられたり、今思えばちょっと待てよ的な……

小学生になると、さらに存在感が希薄になり過ぎて、周囲には音羽の存在が認識出来ないくらいにまで、薄くなっていた。

そもそも、音羽のコミュニケーション能力が低かった所為でもあるのだが、クラスメイトと積極的に関わろうとしなかった音羽にも多少の非は在るかも知れない。

それだけが理由では無いだろうが、クラスメイトに存在が認知されず、存在感が薄くなり、コミュニケーション能力がまた下がり――以下エンドレス。

存在感が薄かったのは幸か不幸か、いじめに遭う事はありませんでしたよ。

6年間村八分状態でしたけどね……

知ってます？

村八分って火事とお葬式以外の行事では無視されるから村八分っていうらしいですよ。どうでもいいですよね。

そんな私にも頑張ろうと思った時期はありました。

ええ、ありましたとも。

思い返せば無駄な事をしたものです。

そう、あれは中学に上がった、その春の事。

私は恋と云うモノを体験した。

俗に言う一目惚れというヤツだ。

中学に上がっても、私にとっては何一つ変わる事は無いと思っていた。そんな私は、中学校での安眠スポットを探すために校内を散策していた。

どうせ私の存在感なんて有って無きに等しいモノで、授業中に堂々と教室のドアを開けても、誰も気がつかない程なのだから。そう、この頃の私の存在感は、遂に両親の認識さえ、潜り抜けるまでになつていたが、それこそ瑣末な事。私にとってはすでに想定範囲内だった。

授業は最初に返事だけしておけば——代返でも可、むしろそっちの方が認識されやすい——何時授業から抜け出そうとも問題ない。

テストなんてものは授業を聞いていなくても、私の存在感の薄さを利用して教務室に忍び込めば——

後はご想像にお任せしよう。

まあ、そのご想像通りだと思う。

なら真面目に受けるよりも、睡眠に使った方が有意義だろう。

校内の9割方を散策し終えた私に残す所は後一つ、屋上への扉を開けた。

「おや、こんな時間に授業をサボっているのは誰だい？」

その言葉に、私の心臓は破裂するかと思ったのを、今でも鮮明に思い出せる。

「早くもサボリ仲間ゲットだぜってか」

扉の音が有ったとは言え、私の存在を認識出来る生徒がこの学校に居たなんて！

という、私の心の声を無視して屋上に居た存在——たぶん男だろう——は私に語りかける。

「おい、聞こえてるか？ 日本語通じてますか？」

その言葉で我に帰った私は、慌てて首を縦に振る。

「ああ、よかったよかった。独り言になってたら、恥ずかしすぎて死ねるな」

朗らかな笑顔と云えばいいのだろうか、ただ彼の笑顔は私には眩し過ぎたのは確かだ。

思い返すと、この笑顔に惚れてしまったんだろう。

「そんな扉の前に居ないでこっち来いよ」

彼は屋上の端——とは言っても、下からは見えない程度に端っこに私を呼び寄せる。

近づいてみると、彼の容姿は平凡よりも少し上、といったところで、背は少し低めだったが、中学生という年齢を考えれば、まだ伸びるだろう。

これで髪型と服装を真面目に考えればそれなりに（一部の層に）人気が出るに違いない。

「まあ、座れよ。俺は神木真吾^{かみきしんご}、お前は？」

「わたし、は、おとわ、なぎさ」

私は腰を下ろしながら応える。

この時、名前を言えた私を誰か誉めて欲しい。

私が喋ったのは（対人の場合）2年ぶりくらいだったし、名前なんて最後に名乗ったのは3年くらい前だった。正直自分の名前だっ
て忘れかけていたくらいだ。

ちなみに入学式はボイコット、クラスの自己紹介の時、私の存在

は忘れ去られていた。

先生、何で私の名前呼ばなかったんだろう……

閑話休題。

「へえ、良い名前だな」

御世辞だろう。そうに違いない。気にしないでおう。

「ここで、なにしてるの？」

「いや、見れば分かるだろ」

確かに見れば分かる。

授業をサボっているのだ。

「じゅぎょう、サボる、なんて、ふりよー？」

「いや、お前だってサボってるからな？」

「わたしは、さぼりじゃ、ない」

「いやいや、お前制服着てるじゃん。生徒以外に誰がそれ着るんだよ」

「じゅぎょう、には、でてる」

「ああ、途中から抜け出して来たってことか？」

「いまでも、でてる」

「あああああ、もう、もっと普通に喋れないのか!？」

「ひう………っ!」

「ああああ! 泣くな、頼むから泣くな!」

まあ、この後20分ほどかけて、後半は涙目——9割以上は彼の所為——ながらに私の人生を語ったのはいい思い出として、胸にしまっておきたい。

それを聞いた彼は、至極普通の対応だった。

「へえー、それなりに苦労してるんだな」

蔑む訳では無く、憐れむ訳でもなく、優越感に満ちた感じでもない。ただ淡々と応えたただだった。

当然のように、蔑みや憐みの眼を覚悟していた私は酷く驚いたものだ。それも、彼の人格を知ってからには不当な評価だった事を明記しておく。

「まあ、人生なんてそんなもんだ。お互い色々在る様だけど、それなりに生きて行こうぜ」

その言葉にぎこちなく頷く私は、『お互いに』という言葉に違和感を覚えたが、他人の過去を聞いてやれる様な——ましてや相談に乗る様な——コミュニケーション能力は皆無だった為、気にしない事にした。

まあ、この時の私は、彼に興味が無かった——興味が無いふりをしていた——だけかもしれないが。

それから私のサボリ生活には新たな、もとい初めての仲間ができた。

私が屋上に行くと大抵彼が居た。居なかった場合は後から来た。

私は彼と会話するために発声練習やコミュニケーショントレーニング、少し背伸びしてお化粧なんかも頑張った。

今思い返せば、まるつきり恋する乙女全開だったな、私。

それからの私は、昔を考えれば別人の様に努力していた。

彼と屋上で出逢ってから2ヶ月後、私たちは付き合い始めた。

切掛けは彼の方からの告白、何時もの屋上サボりの最中に、

「な、俺たち付き合わね？」

ムードも何もなかったが、その言葉に二つ返事です承。

その頃に戻るなら私自身を引っ叩いてでもやめさせていた。絶
対に。

ついでにあの男の顔も引っ叩けていたら………いやなんでもない。
それからは幸せ（錯覚）な毎日を過ごした。

毎日のようにデート。

放課後は駅前の喫茶店。

週末はお泊りや電車に乗ってお買い物。

まあ、この日々があっただけでも、付き合っていた事に文句は無
い。

とは、言い切り辛いけど、悪くは無かったとは言える。

その日々の終わりは唐突——予兆はあったけど、夏休み終盤の頃。

夏休みに入ってから毎日のように遅くまで携帯で話していたのに、その日だけは、彼は電話を掛けて——私の方から電話をする事は稀だった——来なかった。

私はそんな日もあるだろうと気にしていなかったが、その次の日も、その次の日も、彼からの連絡は無く、結局1週間後に私から掛けた電話にも、彼は出なかった。

夏休み終盤、連絡が取れなくなった時点で気が付くべきだったのだろう。

私もおかしいとは思っていたんですけどね。

彼と別れる事になったのは夏休み明けの2学期初日。

クラスの女子——美人度でいえば上から数えた方が早い——が彼と一緒に仲良く——腕とか組みながら——楽しそうに登校していたのを発見した時だった。

まあ、私にだってプライドくらいありますから、すぐに彼に詰め寄りました。

その時の彼の反応ときたら、

「あ、ごめん忘れてた。俺、彼女と付き合う事にしたから――」

「あ、そうなんだ。お似合いだね」

もう頭が真つ白で後半のセリフは覚えていませんが。

なんとかそれだけ応えると、音羽はいつもの屋上に向かった。

取乱さなかった私を誰か誉めていいと思います。

幼馴染とか滅びればいいのに…………

考えてみると私の人生はこれから狂い始めたのだろつ。もちろん、悪い意味で。

その後、中学一学年の間は失恋のショックで、何もする気が起きないまま二学年へと進級。このままでは駄目だと、心機一転して頑張ろうと心に決めた一学期は直下型地震によって校舎が崩壊。

死者は奇跡的に少なく、学校関係者での死亡は0だったのは本当に奇跡だったのかもしれない。

そして、二学期から授業を再開。

思い出作りにと先生方とPTAの配慮によって決行された2泊3日の修学旅行ではバスジャックに遭い。

何時も存在感が無く誰にも認識されない筈の音羽が人質になり、犯人は現金を奪って逃亡。その後3週間に渡って逃亡生活を続け、全国を津々浦々、修学旅行なんて目じゃない旅行を楽しませられた私は、犯人の自殺によって解放された。

解放された私は、家族に存在を忘れられていたのが、何気に一番のショックだった……

3学年になっても、爆弾テロに巻き込まれて爆弾を体に巻いたり、銀行強盗に巻き込まれて今度は世界を津々浦々……いやもう、本当に色々な事がありましたよ。

そして、高校に進学してから気が付いた事が一つ。

私は『死ねない』という事。

別に頭が吹っ飛ばば死ねるんだろうけれど、その状況が作り出せないと言えいいのか。

まあ、高校に進学してからも——受験の時にも——色々あった私はもう疲れ果てていたんでしょう。

だから、高校1年の夏。

私は死んでやろうと思いました。

台所から包丁を持ち出し、物置からはガムテープ。

3畳ほどの広さの風呂場、窓や扉をガムテープで密閉。睡眠薬を大量に服用して、酸性洗剤と塩基性洗剤をドバアつとぶちまけ、最後に、手首に深い傷を付けて浴槽へ。

これで面倒な運命って奴から逃げられると意識が落ち、次に気が付いた時には、病院に居ましたよ。

何故死ねなかったのかと聞いてみれば、どこぞの野球少年の盛大なホームランが私の家の風呂場の窓を直撃したらしい。

そのボールを探しに来た先生と生徒、さらに何故か窓が割れた瞬間を目撃していた近所のおばちゃんと野球部顧問が私を発見——風呂覗くとはいい度胸だ首洗って待ってる顧問——すぐに救急車で運ばれた私は奇跡的に（運悪く）助かったそうだ。

その後も何回か自殺を決行。それら全てが未遂に終わり、何故か生き残ってしまう私。

最後の方なんて、死ぬ事より、どこまで死ねないのかを実験しましたよ。

最終的には『日の光60階』の屋上から飛び降りても生き残った。

私の悪運——ここまで来るとむしろ不運——は、この世界で生きる事が一番の苦行だと判断しているらしい。

病院で目が覚めたとき思った事は、『まだ生きてる』よりも『私は死ねないんだな』の方が先に来た。

どう足？いた処で死ねない——決して『死なない』わけでは無いと思いたい——私は死ぬ事を諦め、ただ黙々と日々を過ごし、高校3年生になった。

一学期、今までの人生でベスト3に入る苦行がやってきた。

夜逃げである。

親の仕事が失敗して、借金たっぷり敗者の末路。

昨日の夜はせつせと荷造り。

今日は「さあ逃げ出すぞ」って一歩手前。

親に忘れられていました。

失敗した。

自分の存在感の無さと不運補正を計算して無かった。

此処まで忘れていたとはいっそ清々しい。

こんな思考回路にも不運補正は働くのかと音羽は投げやりに思う。

自分の失敗だけは認めたくないモノである。

これも若さゆえだろうか。

「ああ、さつさと人類滅びればいいのに」

そして現在。

生ゴミやら燃えるゴミやらと一緒にあって身を縮こまらせている。

不運少女（後書き）

書いたもののこの後の展開まったく書け無くなったので

ボツネタ入り

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1931t/>

練習 短編 没ネタ置場

2011年11月27日20時46分発行